

2026

4.8 (水)

12:10
12:50

12:10-12:15

◆発表者紹介

12:15-12:40

◆プレゼン

12:40-12:50

◆質疑応答

オンライン
(Zoom)

登録はこちら▶▶

https://us02web.zoom.us/webinar/register/WN_wPZ2oF9nRt-kH17RqxizEA

【技術支援】九州大学 Q-AOS

核の不可視性と芸術的知覚： 核戦争とその表象のゆくえ



Key Words

被爆者

核戦争

マリー・キュリー

広島

長崎

冷戦

オセアニア

放射能

検閲

核アーカイブ

デカマス ガブリエル 准教授

九州大学 言語文化研究院 国際文化共生学部門

九州大学大学院言語文化研究院准教授。ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジにて視覚文化学 (Visual Cultures) の博士号を取得、同校で教鞭を執った。

2005年、インターナショナル・ヒラ・リベイ・フェローシップを受賞し、ニューヨーク、ビルバオ、ヴェネツィアのソロモン・R・グッゲンハイム美術館のキュレーター部門に勤務。それ以前は、ニューヨーク近代美術館 (MoMA) の常設コレクションに関するレクチャーを担当。

著書に『Invisible Colors: The Arts of the Atomic Age』(MIT Press, 2019年)がある。同書では、「世界のヒバクシャ (Global Hibakusha)」の声を含め、核時代を表現する1世紀以上にわたる文化的実践を網羅している。パリ市立近代美術館、ソルボンヌ大学 (パリ)、ルンド大学 (スウェーデン)、北アリゾナ大学などの著名な研究機関に招かれ、講演を行っている。

放射能は目に見えず、触覚や味覚で感知することもできない。しかし、マリー・キュリーの時代から現代に至るまで、芸術家たちは一貫して核時代を可視化しようと試み続けてきた。本発表では、芸術的実践が単に核の歴史を表現するにとどまらず、それに対する一つの「カウンター・アーカイブ (対抗的記録)」を構築してきたことを論じる。

具体的には、ラジウムから水素爆弾に至る核戦争に焦点を当て、日本、フランス、マーシャル諸島、そしてナバホ・ネイションにおける1世紀以上の活動を概観する。また、日本の写真家・豊崎博光が「世界のヒバクシャ (Global Hibakusha)」と呼んだ概念についても考察する。国家機密や軍事検閲、誤情報、あるいは隠蔽工作が蔓延する中であっても、芸術の世界において犠牲者たちは常に自らの声を見出してきたのである。

ロシアによるウクライナ侵攻、北朝鮮による継続的な核プログラム、そして最先端の核兵器開発を進める中国の動きなど、核の脅威が再び高まっている現在、こうした声に耳を傾けることは極めて重要である。芸術は単に核の歴史を図解するものではない。不可視のものを可視化し、歴史的な検証の対象とすることで、歴史そのものに介入する役割を果たしているのである。